

中学校における文法項目の系統化の試み — 文法学習表の作成とDDL学習教材への適応 —

神谷 昇 西垣知佳子 小山義徳

千葉大学教育学部

Systematizing the Grammar Items in Junior High School: Application of the Grammar Chart to Data-Driven Learning

KAMIYA Noboru NISHIGAKI Chikako OYAMA Yoshinori
Faculty of Education, Chiba University

本稿では、近年の英語教育の現状を踏まえて筆者らがこれまで行ってきた中学校における文法指導の問題点を指摘し、それを解決するためには、「文法項目の系統表」とそれを参考にした教材作成が必要であることを論じる。具体的には、コミュニケーション重視の英語教育により、英語の「流暢さ」が高まった一方で「正確さ」がおろそかになってきているという現状と、中学生、高校生の文法学習に対する認識から、文法学習の重要性を論じる。また、「データ駆動型学習 (Data-Driven Learning; DDL)」と呼ばれる手法を援用して筆者らがこれまで行ってきた実践研究を概観し、指導がその場限りのものになってしまい、体系的な指導が行えてこなかったという問題点を指摘する。あわせて、十分に体系的な指導が行えてこなかった原因の1つとして、算数・数学で使用される各学習項目を体系的に整理した「系統表」が英語の文法項目には存在しないことを指摘する。そして、このような状況を改善するために、中学校で学習する文法項目の中でも動詞に焦点をあて、それを英語学 (特に統語論) の観点から整理した「文法学習系統表」を提案する。最後に、「系統表」に則った英文法学習用教材の一例を提示し、その特徴について論じる。

キーワード：中学校文法項目 (grammar items in junior high school) 文法学習表 (grammar chart)
データ駆動型学習 (Data-Driven Learning)

1. はじめに

近年、コミュニケーション重視の英語教育が行われ、その結果、英語の「正確さ」がおろそかになっているという指摘が散見されるようになった。このような現状を踏まえ、筆者らはコミュニケーション重視の英語教育に文法指導を効果的に取り入れる手法について研究を行ってきた (例えば西垣・小山・神谷・尾崎・西坂・横田, 2015)。しかし、従来の実践研究は、どれもそのときどきの授業の進度に合わせた、限定的な内容のものであった。これは、文法指導の内容を授業内容に適合させなければならないがために当該文法項目にのみ焦点をあて、文法の体系全体やその中での当該項目の位置付けに注意を向けずに指導を行ってきたことに一因があると思われる。本論文ではこのような問題意識のもと、特に中学校で指導の対象となっている文法項目を英語学の観点から整理し、その上で、英語の「正確さ」を高めるために有効な教材とはどのようなものであるのかについて検討する。

本論文の構成は以下の通りである。第2節では、近年の学習指導要領の内容の変遷と日本におけるコミュニケーション重視の英語教育の現状を概観するとともに、中高生の文法学習に対する意識調査の結果からも、文法指導が喫緊の課題であることを論じる。そして、このよ

うな背景を踏まえて行ってきた筆者らの文法指導についての実践研究を概観し、残された課題を指摘する。第3節では、本論文の調査項目と調査手法について述べ、第4節でその結果を提示する。第5節では、第4節での結果に基づき、教材の例を提示する。第6節は本稿のまとめである。

2. 研究の背景

第2節では研究の背景について述べる。2.1節では、学習指導要領の内容の変遷と日本の英語教育の現状、および、文法が苦手であると考えている生徒の増加について概観し、文法指導の重要性について議論する。2.2節では、筆者らが行ってきた研究について触れ、残された課題を指摘する。

2.1 文法指導の重要性について

はじめに、学習指導要領の内容の変遷とそれを受けて行われている日本の英語教育の現状について概観する。日本の「中学校学習指導要領」(以下、「指導要領」)はおよそ10年に一度の割合で改訂されてきたが、特筆すべきは、1989年以降の指導要領で実際の場面で使える英語力の育成に重点が置かるようになったことである。具体的には、1989年告示の指導要領(文部省, 1989)では「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」の育成が、また、1998年告示の指導要領(文部

連絡先著者：神谷 昇 nkamiya@chiba-u.jp

省,1998)では「実践的コミュニケーション能力の基礎」の育成が求められるようになり、さらに、2008年告示の指導要領(文部科学省,2008)では小学校での外国語活動(実質的には英語活動)が必修化され、実際の場面で使える英語力の育成が目指されることとなった。そして、2015年8月6日に開催された中央教育審議会の資料(中央教育審議会,2015)によれば、今後告示される指導要領において小学校高学年で外国語が教科となり、その結果、日本の英語教育の底上げが図られ、高校卒業時に目指す英語力のレベルもこれまで以上に高まることが期待されている。その中でも中学校においては、「身近な話題について理解や表現、情報交換ができるコミュニケーション能力を養う」と述べられている。

このようなコミュニケーション重視の背景を踏まえ、近年ではCommunicative Language Teaching (CLT)を援用して英語の指導がなされるようになってきた。しかし、CLTによる指導では、流暢さが育成される一方で、文法の正確さがおろそかになるという指摘がある(金澤,2011;白井,2014;Richards and Rodgers,2014)。また、今後は指導要領の改訂に伴い、これまで以上に、英語でのコミュニケーションが重視される状況になるものと予想されるが、これには、「正確さ」「複雑さ」「抽象度の高さ」「認知的な高度さ」に対応できる言語力の育成が必要であり、それには、「文法や構造」に対する知識が大切であると考えられる(長谷川(編),2015,p.12)。以上から、コミュニケーション重視の英語教育の中にあっても、英語の「正確さ」を高める指導が依然として必要であると考えられる。

さらに、コミュニケーション能力の向上を考える際に、Canale and Swain (1980)の提案を無視することはできない。彼らによると、コミュニケーションには、「文法能力(grammatical competence)」、「談話能力(discourse competence)」、「社会言語学的能力(sociolinguistic competence)」、「方略能力(strategic competence)」が必要とされるが、文法能力はコミュニケーション能力の一部であるという点も忘れてはならない。

ただし、コミュニケーション能力の育成を重視しているからといって、文法学習の重要性が近年の英語教育で軽んじられているわけではないことも付け加えておかなければならない。具体的には、2008年に告示された指導要領(文部科学省,2008)では、文法はコミュニケーション能力を支えるものであり、言語活動と有機的に関連させて指導するように規定されていることから、「適切な方法」を用いた文法指導が現在でも求められていることがわかる。

次に、日本の中学生と高校生の文法学習に対する意識について概観する。ベネッセ総合教育研究所(2012)によると、中学生の約7割が文法学習が必要であると感じている。さらに、ベネッセ総合教育研究所(2014)では、英語学習の中でも文法を難しいと考えている中学生・高校生の割合はそれぞれ約7割であることが指摘されている。このことから、多くの生徒が、文法学習が必要であるにもかかわらず、それを効果的に進めることができていない状況が推察される。

2.2 データ駆動型学習の概要と問題点

前節で概観したような背景を踏まえ、筆者らは西垣・小山・神谷・尾崎・西坂・横田(2015)などで「データ駆動型学習(Data-Driven Learning;DDL)」と呼ばれる手法を用いて文法指導の実践研究を行ってきた。以下ではDDLの概要を説明し、残された課題を提示する。

DDLとはコンピューターとコーパスを援用した英語の指導法である。具体的には、新聞や小説などに基づいて構築されたコーパス(言語データベース)から、検索ソフトを用いて用例を抽出し、学習者自らがその用例中に潜む「規則」を引き出すことにより学習目標である語彙や文法項目を学ぶ手法である。例えば、図1はwantを含む用例を検索した結果であるが、学習者は、これらの文例から、wantには名詞ばかりでなく、不定詞のtoと動詞の原形も後続することを理解する。また、この手法を用いた学習では、ことばの規則を言葉で説明する必要があるため、メタ言語知識が育成できることも期待される。しかし、これまで実践されてきたDDLは英字新聞コーパス等を利用したもので、難易度が高く、中・上級者向けの学習方法であった。したがって、DDLを中学生や高校生を対象として使用するには、一定の配慮が必要であった。

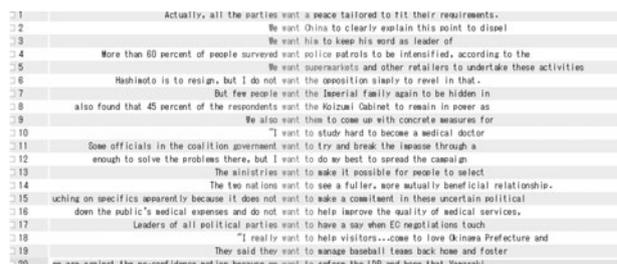


図1 wantの検索結果

このような難易度の問題点等を受け、本研究グループでは、中学生や高校生に対してもDDLによる指導が可能となるように、用例を英語の教科書などから収集し、英文自体の難易度を下げるように改良を行った。また、図2に示されているように、日本語の対訳もあわせて提示することで、文の意味を掴みやすくして、学習者の負担を軽減することに成功した。

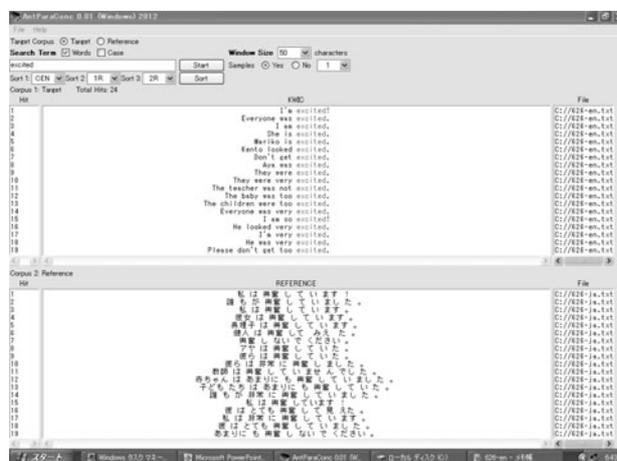


図2 難易度を下げたコーパスとexcitedの検索結果

上で述べたように、本来、DDLはコンピューターに搭載されたコーパスと検索ソフトを使用して学習を進める手法ではあるが、学習者や指導者が常にコンピューターが利用できる環境にあるとは限らない。例えば、普通教室ではパソコンを使用できないため、上記のような指導を行うのは非常に困難である。したがって、普通教室でもDDLによる学習が進められるよう、本研究グループでは、図3に例示するワークシートを作成した。このワークシートでは、コンピューター上の検索画面を参考にして、キーワードが文の中心に来る形式(Keyword in Context; KWIC形式)を採用した。図3では、受動態の学習が目的であることから、過去分詞のlovedやwrittenが例文の中央に配置されている。このような工夫に加えて、学習者の負担を下げるために、英文の右側に日本語訳も併記した。さらに、学習者が注目すべき点が明らかになるよう、例文には網掛けや色づけを施し、重要なポイントに気がつくことができるようにするためのタスクや指示も掲載した。そして、このワークシートでは、グループやクラスで気がついた内容をシェアすることにより、協同学習が進められるようなタスクを取り入れた。

Unit 1 - ① 発見ワークシート 4月 日 組 氏名			
リスト1			
例	This group loved many people.	このグループは多くの人々を愛した。	
1	Jeans loved old and young people.	ジーンズは年齢にも関係なく愛されている。	
2	The new teacher will love the students in the village.	新しい教師はその村の生徒に愛されるだろう。	
3	Manga loved people around the world.	マンガは世界中の人々に愛されている。	
4	Soccer loved Brazil.	サッカーはブラジルで愛されている。	
5	Sumo loved Japan.	相撲は日本で愛されている。	
6	John loved everyone.	ジョンはみんなに愛されていた。	
7	Pele loved people all over the world.	ペレは世界中の人々に愛されていた。	
8	The elephants loved children at that time.	その象たちは子供、子どもたちに愛されていた。	
リスト2			
例	Their new story written the young.	彼らの新しい話の著者のために書かれた。	
1	Most scientific magazines written English.	ほとんどの科学雑誌は英語で書かれている。	
2	Signs on buses written four languages.	バスの標識は4か国語で書かれている。	
3	A new drama will be written Sheldon.	新しいドラマはシェルドンによって書かれるだろう。	
4	The school slogan must be written the classrooms.	学校のスローガンは教室に書かれる必要がある。	
5	The same story written different people.	同じ話が異なる人々によって書かれている。	
6	Winnie-the-Pooh written a British writer.	ウィニーザプーは英国の作家によって書かれた。	
7	This story was written 1943.	この話は1943年に書かれた。	
8	These essays were written a Thai woman.	これらのエッセイはタイの女性によって書かれた。	
タスク1 リスト1とリスト2で、繰り返し使われている日本語はなんですか。			
あなたの発見		友達の発見	
タスク2 リスト1とリスト2で、繰り返し使われている英語は何ですか。			
あなたの発見		友達の発見	
タスク3 リスト2の「左」と「右」の網掛けの語に注目しましょう。共通することは何ですか。			
あなたの発見		友達の発見	
左の語		左の語	
右の語		右の語	
タスク4 先生と一緒に、語の「動詞」や「形」からわかったことやルールをまとめましょう。			

図3 ワークシートの例

以上のような学習者に文法規則を発見させる「教えない教え方」をとおして、従来の「覚える文法」から脱却し、「考える文法」へ、「教わる文法」から「探究する文法」へ、そして、「依存的な学び」から「自立した学び」へと導くような指導を行ってきた。さらには、DDLをとおして、「考える力」や「言葉を観察する眼」を育てたいとも考え、実践を行ってきた。紙幅の都合上、詳細を述べる余裕はないが、西垣・小山・神谷・尾崎・西坂・横田(2015)は、これまでの実践を統合した結果から、DDLを用いて指導を行った実験群と従来どおりの手法を用いて指導

を行った統制群を比較すると、指導直後の段階では指導事項が定着しているかどうかを測るテストにおいて両者に統計的な差は認められないが、約1ヶ月後の事後テストでは統計的に有意な差があり、DDLが効果的な学習法であることを報告している。

このように、DDLは文法学習を行う上で、有効な手法の1つであると考えられるが、未だ、以下のような3つの問題点がある。はじめに、用例を観察して文法規則を引き出す活動には相応の時間が必要であり、授業でDDLを取り入れると、文法の学習に続いて行うコミュニケーション能力の向上のために必須の表現活動に割く時間があまり取れない。さらに、これまで作成してきたDDL教材は、授業や教科書の進度・内容に沿って作られているために、一つ一つが独立したものになってしまう、文法学習の道筋や全体像、つまり、文法項目の系統性が把握できない。そして、教科書によって学習順序など文法項目の扱いが異なるという問題もある。

上記の問題点の中で、指導者、学習者ともに各文法項目の関連性を理解するのが困難であるのは、そもそも、英文法の学習には「系統表」がないことに起因しているように思われる。例えば、算数・数学には系統表があり、学習項目の相互関連性が容易に理解できる。次頁の図4がその一例であり、例えば「A 数と計算」の項目については、小学校1年生で学習する「100までの数」が小学校3年生では「1億までの数」に発展し、高学年では、それに分数や小数の概念が加わることが理解できる。そして、それらが中学校で学習する「正負の数」や「平方根」と関連していることも容易に理解できる。

以上をまとめると、コミュニケーション重視の授業が普及する中であって、文法の正確さを向上させるためのDDLによる指導法や教材を筆者らは開発してきたが、教材が単発的なものにとどまっているという点が最大の問題点であり、これは、文法体系全体を見渡すことのできる系統表がないことにも一因があると考えられる。このような背景から、本論文では図4に相当する英語の文法学習系統表を作成し、それを踏まえた教材作成を試みることとした。

3. 調査項目と調査方法

前節で議論した内容を踏まえ、本稿では以下の3点を調査項目として設定した。

- (1) 中学校で扱われる文法項目にはどのようなものがあるのか？
- (2) 抽出した文法項目間の関連性や系統性を視覚化する文法学習表とはどのようなものであるのか？
- (3) 上記の結果を踏まえ、どのようなDDL教材が作成できるのか？

上記の3項目を調査するにあたり、中学校英語検定教科書から扱われている文法項目とそれを含む文例を抽出した上で、生成文法(特にその中でも統語論)の観点から、各項目間の関連性に着目して文法項目と文例の整理を行った。

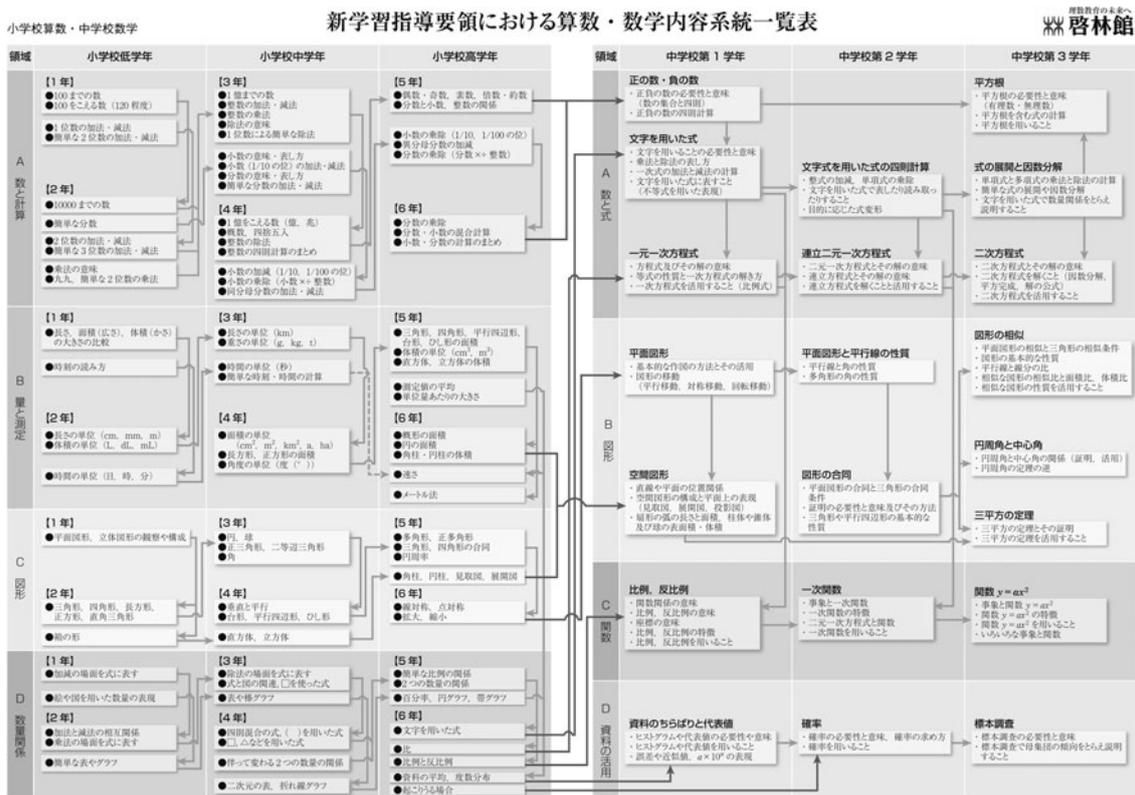


図4 算数・数学の系統表 (啓林館, n.d.)

以下の第4節では、(1)と(2)の結果について報告する。また、5節では(3)に対する答えとなるような教材の一例を提示する。

4. 調査結果

本節では前節で提出した調査項目のうち、(1)の中学校で扱われる文法項目についての調査結果を報告し、それに基づいて(2)の系統表を提示する。なお、以下では紙幅

の都合により、文法項目の中でも動詞を中心とした事項に焦点をあてて議論する。

はじめに、前者に関する結果は表1にまとめられている。なお、表1における例文はすべて東京書籍発行の中学校用検定教科書New Horizon English Course (笠島・関ほか, 2013)に掲載されていたものである。

議論を進める前に表1の1から6について簡単に説明する。1の命令文は使用する際には話者の他に聞き手も必要とされる特徴があり(例えば独り言のような、聞

表1 動詞を中心とした文法項目

文法項目	詳細	例
1 命令文	<ul style="list-style-type: none"> 一般動詞の命令文 禁止を表す命令文 (Don't ...) be動詞の命令文 勧誘を表す文 (Let's ...) 依頼を表す表現 (Will you ...? / Could you ...? など) 	<ul style="list-style-type: none"> Use this net. Don't get on the cable car here. Be careful. Let's try <i>kingyo sukui</i>. Could you read this letter for me?
2 助動詞	<ul style="list-style-type: none"> can, mayなどの助動詞 be going to ... 一般動詞の疑問文や否定文で使用されるdo/does/did be動詞も含む 	<ul style="list-style-type: none"> We can ride a bike. I am going to visit Yakushima tomorrow. I do not have a car. Are you from Canada?
3 be動詞	<ul style="list-style-type: none"> be動詞を含む文 (現在形, 過去形) There is/are ...で始まる文 	<ul style="list-style-type: none"> This is my desk. Jenny was a guide dog two years ago. There is a clock in the lobby.
4 相	<ul style="list-style-type: none"> (現在/過去) 進行形 (現在) 完了形 	<ul style="list-style-type: none"> Sakura is listening to music now. I have lived in Japan for three years.
5 態	<ul style="list-style-type: none"> 受動態 	<ul style="list-style-type: none"> The group is loved by many people.
6 一般動詞	<ul style="list-style-type: none"> 一般動詞の肯定文, 疑問文, 否定文 文型など 	<ul style="list-style-type: none"> I like soccer. Her song makes me happy.

き手が存在しない状況では他者に命令を下すことができない), この特徴を踏まえると, 通常の命令文に加えて, Let's ... のように聞き手に対して勧誘を行う表現や, Will you ...? のような聞き手に何らかの依頼を表す文も命令文の一種として分類できる。次に, 2の助動詞については, canやwillなどに加えて, 一般動詞の疑問文や否定文に使用されるdo/does/didも, それらが現在や過去といった時制を担い, また, 一般的な助動詞と同等の

振る舞いをみせること (具体的には, 疑問文ではそれらが主語の前に置かれ, 否定文ではこれらにnotが後続する; いわゆる「doによる支持 (do-support)」) から, 助動詞に分類できる。また, be動詞 (と完了形で使用されるhave) についても, do/does/didと同様の振る舞いをすることから, 動詞ではあるものの, 「助動詞」としての性質も持つことが知られている (いわゆるhave/be raising)。表の3と4については, これ以上の説明は不

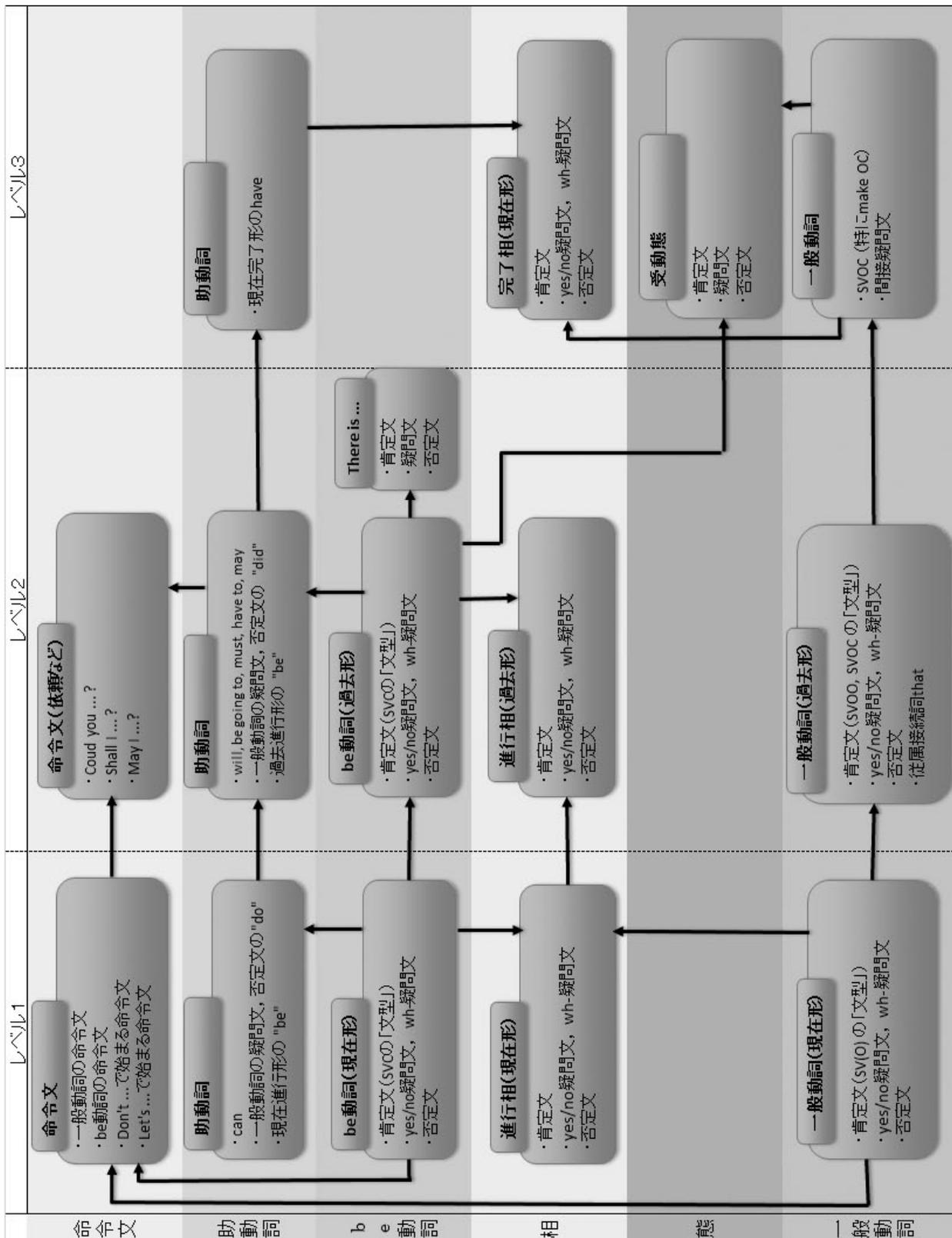


図5 中学校における文法項目の系統表

要であろう。5の態には、本来は能動態と受動態が含まれるが、能動態は便宜上、「文型」とあわせて扱うので、本稿では後者のみとした。6の一般動詞についても説明は不要であると思われる。¹

表1に提示した項目について、その文法的な特徴から精査し、まとめたものが図5の「系統表」である。²

図5で左端の列は表1に示す1から6の文法項目に対応する。そして、各項目をさらに下位分類し、その「複雑さ」（あるいは「難易度」）に応じて、レベル別に配置したものが図5である。

この図において、関連する項目が矢印により結び付けられていることにも注意されたい。例えば、be動詞の現在形は、単独でSVCの文型に使用されるばかりでなく、いわゆる「現在進行形」にも使用されるので、その関係性を明示できるよう、それらが矢印で結び付けられている。さらに、be動詞の過去形は、その現在形と時制の違いという点で関連性があるので、両者は矢印で結び付けられている。

このほかに、図5は縦方向にも横方向にも読むことができることも特徴として挙げられる。まず、縦方向に文法項目を追っていくと、同等の「レベル」の項目が列挙されていることがわかる。また、横方向に文法項目を追っていくと、関連する事項が配置されていることが理解できる。例えば、「相」を横方向に追っていくと、現在進行形が過去進行形へ、そして、中学校の最終段階ではそれが現在完了形にまで発展していく様子が俯瞰できる。また、「be動詞」を左から右に追っていくと、それが現在形、過去形と発展し、最後にそれが一般動詞（の過去分詞）と組み合わせられて受動態へと発展していくことが理解できる。

このような系統表の利点としては、以下の4つがある。まず、この図は動詞に限定したものではあるが、指導者にとって当該文法項目が文法の体系のどこに位置付けられるのかが容易に理解できるばかりでなく、この図に基づいた教材を使用することで学習者にとっても既知の項目を拡充する方法での学習が可能となり、個々の文法項目の羅列、丸暗記を防止できるという利点がある。また、この図は、指導や学習を進める上でのいわば「ロードマップ」とでも呼べるものであり、現在学習している事項と関連事項、そして、最終的な目標が明確に把握できるという利点がある。³ 3点目として、文法項目は一度で完全に習得することは通常、不可能であり、何度もそれに触れる必要があるが、この図に従って学習を進めれば、新規事項を学習する際に既習事項にも改めて触れることになるという意味でも望ましいと言える。最後に、この図から、学習者がどこで躓いているのかを把握できる可能性がある。近年、中学校および高等学校で学習した事項が十分に習得できていない状態で大学に入学する学生のこと問題となり、その結果、多くの大学でレメディアル教育が行われるようになってきているが、この図を参考にすれば、学習者がどの文法事項に躓いているのか、そして、その根本的な原因となっている文法事項は何であるのかを把握できる可能性があると思われる。

5. 文法指導に効果的な教材作成

最後に、これまでの議論を踏まえ、文法指導に効果的な教材のあり方について検討する。本稿のこれまでの議論から、教材作成にあたっては以下の事項に留意する必要があると思われる。

- ・既習事項のうち、関連する事項についての復習タスクを入れる。
- ・新規事項を導入する際には、既習事項との関連性(類似点, 相違点)にも注意を向けさせる。

例えば、過去進行形を新規学習事項として導入する場合を考えてみよう。図5にしたがえば、過去進行形はbe動詞の過去形、ならびに、現在進行形と関係があることが分かるので、それらとのかかわりを踏まえて指導するのが良いと思われる。つまり、現在進行形はbe動詞の現在形に一般動詞の現在分詞を後続させるという形式を持ち、be動詞を文頭に置くことで疑問文が、また、be動詞の直後にnotを置くことで否定文が形成できるということを生徒に改めて想起させ、復習とする。そして、過去進行形はbe動詞の過去形が使用されるという点を除いて、現在進行形と似たような特徴を持つことをタスクなどを通して生徒に理解させるのが良いと考えられる。

以上の留意事項を考慮に入れ作成した教材の例が図6と図7である。図6では新出文法事項としてSVOCの文型で使用されるmakeの用法を取り上げ、図7のワークシートでは、それをさらに他の動詞に拡張できることが学習できる。より具体的には、図6では、いわゆる第3文型のmakeが既習事項であることを前提とし、タスク2により、それをはじめに復習する。その上で、新規事項であるリスト2の例文を見ながら、タスク3でmakeの意味やmakeに後続する要素、特に語の配列パターン

発見シート ①			
平成 年 月 日 期 番 氏名			
リスト1 今までに習ったmakeの文			
1	Mami	made	a doll. マミは人形を作った。
2	Our group	made	curry and rice. 私たちのグループはカレーライスを作った。
3	I will	make	a birthday cake for Yuki. 私はユキのために誕生日ケーキを作るつもりだ。
4	You will	make	friends soon. あなたはすぐに友達を作るだろう。
5	Hollywood	makes	great movies. ハリウッドは素晴らしい映画を作る。
リスト2 新しいタイプのmake			
6	The rain	made	everyone wet. 雨はみんなをずぶ濡れにした。
7	Those words	made	me happy. あれらの言葉は私を幸せにした。
8	The news	made	Nancy sad. その知らせはナンシーを悲しくした。
9	His words always	make	Bob angry. 彼の言葉はいつもボブを怒らせる。
10	This work will	make	her busy. この仕事は彼女を忙しくするだろう。
11	Her song	makes	me happy. 彼女の歌は私を幸せにする。
1 英文を先生と一緒に読もう。 <input type="checkbox"/> 読みました			
2 リスト1のmakeの意味は何か。 リスト2を見よう。 ○ makeの日本語に訳を□で囲もう。made/makes/makesの日本語の意味は何か。 3 ○ make/makes/madeの右側にくる語に共通する特徴は何か。			
リスト1, 2の日本語訳と英文の構造を観察して、発見した言葉のルールやパターンを書こう。 自分の意見 友達の意見			
4			
まとめ			

図6 SVOCのmakeの発見ワークシート（その1）

に注目させ、タスク4で第3文型のmakeと第5文型のmakeの違いに着目させることをねらっている。同様に、図7でも、はじめに第5文型のmakeについて復習を行い、keep, find, leaveも同じ文型に使用できることに注目できるよう設計されている。このように、新出事項をただ単に提示するだけでなく、既習事項と対比させることで、より理解が深まると期待される。

発見シート ②		5月 日 組 番 氏名		
復習				
1	Her song	makes	me happy.	彼女の歌は私を幸せにする。
2	The example	makes	the point clear.	その例はポイントを明確にする。
リスト1				
3	We must	keep	the river clean.	私達は川をきれいに保たなければならぬ。
4	My mother always	keeps	the room warm.	私の母はその部屋をいつも暖かく保つ。
5	His interesting talk	kept	the students quiet.	彼の興味深い話は、生徒たちを静かに保った。
リスト2				
6	You will	find	the book interesting.	あなたはその本が面白いとわかるだろう。
7	I	found	the girl shy.	私は少女が恥ずかしいことがあった。
8	Steve	found	the job difficult.	スティーブはその仕事が難しいとわかった。
リスト3				
9	Please	leave	me alone.	私を一人にして。
10	Don't	leave	the door open.	ドアを閉めておくな。
11	We	left	the question open.	私達は問題を未解決のままにしていた。
1	英文を先生と一緒に読もう。 <input type="checkbox"/> 読みました			
2	リスト1の keep/kept の意味は何か。 _____			
2	リスト2の find/found の意味は何か。 _____			
	リスト3の leave/left の意味は何か。 _____			
3	リスト1,2,3の keep/find/leave などの動詞の右側にくる語に共通する特徴は何か。 _____			
4	リスト1,2,3の日本語訳と英文の構造を観察して、発見した言葉のルールやパターンを書こう。			
	自分の意見	友達の見解		
まとめ				

図7 SVOCのmakeの発見ワークシート (その2)

6. まとめ

最後に、本論文で議論したことをまとめ、残された課題を提示する。本稿の第2節では、日本の英語教育の現状を概観した後で、文法学習の重要性を指摘した。第3節で調査項目を提示し、第4節で文法を体系的に学習するためには、算数や数学のような系統表が必要であることを論じ、動詞関連項目について文法の系統表を提案した。第5節では、系統表を踏まえ、既習事項と対比させながら文法学習が必要であることを指摘し、それに基づいた教材の例を提出した。

今後の課題としては以下の3点が挙げられる。まず、本論文では中学校での文法項目を中心に調査した結果を報告したが、高校の文法項目やそれがどのように中学校の文法項目と関連するののかについては、検討が必要である。また、小学校英語活動で使用されている言語材料にどのようなものがあり、それがどのように中高の文法項目と関連するのかも不明である。さらに、本稿で提示した「系統表」はあくまでも文の構造に着目したものであり、第二言語習得研究で指摘されている習得順序などを考慮に入れていないことも課題である。今後はこのような点も考慮に入れて系統表を改訂していく必要がある。

謝 辞

本論文は全国英語教育学会第41回熊本研究大会（於熊本学園大学）における口頭発表（神谷・西垣・小山, 2015）の内容に加筆・修正を加えたものである。発表の際に有益なコメントをいただいた多くの参加者に感謝する。なお、本論文における誤りはすべて筆者に帰するものである。

注

- 表1に示されている文法項目はおおよそ、以下のような統語構造に対応する。つまり、命令文はCP、助動詞はTP、be動詞・相・態・一般動詞はVPに相当する。VPをさらに精緻化することも可能であり、その場合には、相がAsp(ect)Pに、態がVoicePに対応し、be動詞と一般動詞はvP（またはVP）であると考えられる。また、文型（に分類される事項の多く）は動詞の項構造と関係しているものと考えられる。なお、一般動詞の項目に疑問文が入っているが、本来、それはCPとの関わりで捉えるべき事項であり、分類に不自然な点が残っているのも事実である。したがって、表4（と図5）については、今後もさらなる検討が必要である。
- 図5にはいわゆる「未来形」についての言及がないが、それらについては、助動詞のwill, および, be going toがその役割を担うと考えられる。また、付加疑問文と感嘆文については『中学校学習指導要領解説外国語編』（文部科学省, 2008）に言及がないので省略してあるが、それらは命令文と同様にCP領域（図5の一番上の項目）に関係するものと考えられている。
- 『中学校学習指導要領解説外国語編』（文部科学省, 2008）の「(4) 言語材料の取り扱い」の中で「英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとまりをもって整理するなど、効果的な指導ができるよう工夫すること」（下線は筆者による）と述べられていることにも注意されたい。

参考文献

- ベネッセ教育総合研究所. (2012). 『小・中学校の英語教育に関する調査』（速報版）, http://berd.benesse.jp/up_images/research/soku_all.pdf, 2015年3月10日検索.
- ベネッセ教育総合研究所. (2014). 『中高生の英語学習に関する実態調査2014』（速報版）, http://berd.benesse.jp/global/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_ALL.pdf, 2015年3月10日検索.
- Canale, M., and Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language testing and teaching. *Applied Linguistics*, 1, 1-47.
- 中央教育審議会. (2015). 「英語教育の抜本的強化のイメージ」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2015/08/10/1360841_5_3_1.pdf, 2015年9月24日検索.
- 長谷川信子（編）. (2015). 『日本の英語教育の今、そして』

- て、これから』東京：開拓社。
- 神谷昇・西垣知佳子・小山義徳. (2015). 「中学校における文法項目の系統化の試み—文法学習表の作成とDDL学習教材への適応—」, 全国英語教育学会第41回熊本研究大会における口頭発表.
- 金澤洋子. (2011). 「第3章 外国語教授法」, 岡秀夫(編著)『グローバル時代の英語教育—新しい英語科教育法』, 東京：成美堂, pp.17-34.
- 笠島準一・関典明他. (2013). *New Horizon English Course 1, 2, 3*, 東京：東京書籍.
- 啓林館. (n.d.). 「新学習指導要領における算数・数学内容系統一覧表」, https://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/text/chu/.../math_keitouhyo.pdf, 2015年4月5日検索.
- 文部省. (1989). 『中学校学習指導要領』, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/old-cs/1322455.htm, 2015年9月6日検索.
- 文部省. (1998). 『中学校学習指導要領』, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320101.htm, 2015年9月6日検索.
- 文部科学省. (2008). 『中学校学習指導要領』, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/_icsFiles/afiedfile/2015/03/26/1356251_1.pdf, 2015年9月6日検索.
- 文部科学省. (2008). 『中学校学習指導要領解説外国語編』, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf, 2015年9月24日検索.
- 西垣知佳子・小山義徳・神谷昇・尾崎さおり・西坂高志・横田梓. (2015). 「フォーカス・オン・フォームに取り入れるデータ駆動型学習の効果の検証」, 『英語授業研究学会紀要』24, 49-63.
- Richards, J. C., & Rodgers, T. S. (2014). *Approaches and methods in language teaching*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 白井恭弘. (2014). 「コミュニケーションな第二言語教育とは何か」, 上智大学CLTプロジェクト(編), 『コミュニケーションな英語教育を考える』東京：アルク, 10-24.